鬼の子　　福島県

むかし、あるところに、姉さんと弟が、ふたりで暮らしていました。

あるとき、鬼が、りっぱな男の人に化けてやって来て、

「姉さんを嫁にくれ」といいました。弟は、

「おれひとりでいると、鬼が来たりして怖いから、だめだ」とことわりました。男の人は、

「鬼なんか来ないようにしてやるから、ぜひとも嫁にくれ」といって、むりやり、姉さんを背負って行ってしまいました。

弟はしばらくひとりで暮らしていましたが、そのうちだんだん姉さんが恋しくなってきました。そして、もし姉さんが生きていたらどこかにいるはずだから、会いに行こうと思いました。弟は、観音さまに七日の間、断食ごもりをして、

「どうか、姉さんに会わせてください」とお願いしました。

七日目の晩、観音さまが夢枕に立って、お告げがありました。

「家の前の茅の尾押しわけかきわけ行くと、大きな家がある。それが姉の家だから行ってみろ」

弟は、にぎり飯をいくつもいくつも握って、茅の尾押しわけかきわけして行きました。

そろそろ日が暮れてきたころ、とてつもない大きな家がありました。その近くに小さい家があったので、弟は、その小さい家に行って、

「このあたりに、若い女の人が嫁に来ていませんか」とたずねました。すると、そこの主人が、

「となりの大屋敷にいることはいるが、あの家の者は、みんな鬼だよ。でも、みんな朝早くに出かけて行くから、今夜はうちで泊まるといい」といってくれました。そして、夜が明けると、弟に、

「今ごろみんな出かけただろうから、行っておいで。家に入るとき、着物をぬいではだかで入るんだよ」と、親切に教えてくれました。弟は、はだかになって家の中に入って行きました。

行ってみると、姉さんと、鬼の子がいました。鬼の子は、姉さんと鬼の大将とのあいだに生まれた子どもでした。姉さんは、

「だれだと思ったら、おまえが来てくれたのか」と、たいそうよろこんでむかえてくれました。そして、
「夜になって鬼たちがみんな帰ってくると、おまえ、食われてしまうから、かくれていなさい」といって、弟をかくしました。
　真夜中になると、鬼たちが帰って来ました。鬼の大将は、
「なんだ、今日、だれか家に来たな」といいました。すると、鬼の子が、
「だれも来ない」といいました。
「だれも来ないはずはないわい。家の前のはすの葉のつゆが落ちている。だれか来たにちがいない」
「ほんとは、おれのおじさんが来たんだけど、みんなに食われてしまうから、出さない」
と、鬼の子がいうと、鬼は、
「いや、食わないから出せ」といいました。
「じゃあ、約束だぞ」
鬼の子はそういって、弟をかくれ場所から出しました。　鬼は、たいそうなごちそうをして、その晩は、弟を泊まらせました。
　つぎの日、鬼は、弟に、
「鬼の宝物を見せてやるから、ついて来い」といいました。すると、鬼の子が、こっそり、
「おじさん、ひとを煮る釜を見せられたら、そばに行っちゃいけないぞ」といいました。
　弟は、鬼にあっちこっち案内されて、
「ここは穀蔵だ」「ここは種蔵だ」「ここは蜜蔵だ」「ここは宝蔵だ」と、ずうっと見て回りました。最後に、
「これは、ひとを煮る釜だから、来てみろ。ようく見ろ」といいました。弟が、戸口に立って、
「いや、ここでも見えます」というと、鬼はしつこく、
「中に入って見たらいい」といいます。
「いやいや、ここでも見えます」
　すると、鬼は、弟に飛びかかって、がらりと釜の中に放りこみました。それから、鬼の子をよんで、

「はやく火打石を持ってこい」といいました。鬼の子は、すりこ木を持って行きました。
「なんだ、このやろう。すりこ木じゃなくて、火打石を持ってこい」
鬼の子は、すり鉢を持って来ました。
「すり鉢でなくて、火打石だ」
鬼の子はこんどは、なべを持って来ました。
「なんだおまえは。役に立たない子だな。それじゃおれが火打石を取ってくるから、おまえは釜のふたをようく押さえてるんだぞ」
鬼はそういって、火打石を取りに行きました。そのひまに、鬼の子は、釜のふたをがらりと取って、弟を助け出しました。
弟は、姉さんと鬼の子といっしょに、逃げだしました。
しばらく行くと、大きな川がありました。三人は、そこにつないであった船に乗って川を渡りました。鬼は追いかけて来ましたが、船がないので渡れません。そこで、川の水に口をつけてずずーっと飲みはじめました。鬼は、あっというまに、川の水をみんな飲みほしてしまいました。ところが、鬼が渡ろうとしても、川底の泥がこたこたで歩けません。ぐずぐずしているうちに、鬼の子が泥を取って鬼の顔にぺたっとぶつけました。鬼は気持ちが悪くなって、飲んだ水をぐふーっとはき出しました。また飲んでははき出ししているうちに、鬼は弱って動けなくなってしまいました。
三人は、無事にうちへ逃げかえりました。
鬼の子がいいました。
「おれは、今はこうやっているけれど、鬼の子なんだから、大きくなると人をとって食うようになる。だから、今のうちに、おれの頭を取って門の戸口につきさしてくれ。足と手は、年神さまの松の木にかけてくれ。そうすると、どんな鬼も人間を怖がって来なくなるから」
それからのち、門の戸口に、鬼の頭の代わりに豆の殻を立てて、鬼をふせいだということです。そして、年神さまの松の木にかけた割り木を鬼打木といいます。

村上郁再話

資料『鬼の子小綱―福島の昔話』山本明／桜楓社